

テル・レヘシュの初期シナゴーク跡

テル・レヘシュの発掘調査で、今年、最も重要な発見となったのは、意外な形で偶然に見つかった新約聖書時代の初期シナゴーク跡だ。ドローンで撮影した空中からの写真を見ると、後期鉄器時代（紀元前6～7世紀）の石組の壁が2列に並び、それを壊すようにして、四角い建物が築かれていることがよくわかる（右写真）。建物の大きさは、南北が長さ8.5mを測るが、東側の壁が未調査になっていて、東西方向はまだわからない。自然石を用いた石組の壁が囲む建物の部屋は、四角い切石が壁沿いに並べられ、部屋の中央には、同じく長方形の切石がぼつんと一つ置かれている。建物の入り口は、おそらく、未発掘の東側の壁にあったと考えられる。出土した土器片などから見ると、建物が建設されたのは、紀元後1世紀。ちょうど、イエス・キリストが活躍していた新約聖書の時代、あるいは、ユダヤ教で言うところの「第二神殿時代」、つまり、バビロン捕囚から帰還したユダヤ人たちがエルサレムに築いた第二神殿がまだ建っていた時代にあたる。

建物の壁沿いに石のベンチが並び、部屋の中央に石の台座が設けられるのは、これまでに知られている初期シナゴーク跡に共通する特徴的な構造だ。シナゴークとは、古代から現代に至るまでユダヤ人の生活の核となる場所で、宗教施設であり、また集会所でもあったため、大勢の人々が座るためのベンチが必要だったのだ。初期シナゴークの存在を示す最初の証拠は、新約聖書の時代を文献学的・考古学的に研究する山野貴彦氏によると、紀元後1世紀頃になって現れる。文献的には、新約聖書の福音書やフラヴィウス・ヨセフスの著作に、カファルナウム、ナザレ、エルサレムなど、いくつかのシナゴークが、ユダヤ人たちの集会の場として言及されている。福音書によれば、ナザレのイエスは安息日になるとシナゴークを訪れて、人々に教えや奇跡的な癒しを施し、使徒言行録によれば、パウロは地中海世界の宣教旅行に際して新しい町ではまずシナゴークで教えを試みた。これに対して、これまで考古学的に明らかになっている初期のシナゴーク跡は、マサダ、ヘロディオン、ガムラ、モディイン、ミグダルなど7遺跡の例のみで、テル・レヘシュ遺跡における今回の新発見は、これに非常に貴重な事例を付け加えたことになる。

初期シナゴークの時代

紀元後1世紀は、ユダヤ人たちがいわゆる「イスラエルの地」の支配を久しぶりに回復する一方で、新たに地中海世界を席卷したローマの脅威にさらされ、民族意識が高揚した時代だ。そうした緊張の高まりは、紀元66年からの第1次ユダヤ戦争、紀元後2世紀の第2次ユダヤ戦争として頂点に達し、激動の時代の中で、律法へのさらなる忠誠が求められ、とりわけ清浄規定の遵守がユダヤ教内の派閥の枠を越えて強調されるようになる。身体や器物を清く保つために必要なミクヴェや石灰岩製容器の利用が、この時代に発達し、その宗教的な実践を周知徹底するためにシナゴークが重要な役割を果たしたのだ。

ミクヴェとは、ユダヤ教において、人間または器物を清める祭儀的沐浴のための儀礼用水槽で、内部には漆喰が施され、ふ

つう、一辺に階段を備えている。これまでに発見された初期シナゴーク跡は、いずれも建物に接続して、このようなミクヴェが設置されている。テル・レヘシュ



遺跡の場合、シナゴーク跡の南東に約20m離れた場所で、漆喰を施した階段状遺構が以前の調査で見つかっていて、ミクヴェだとも考えられたが、漆喰下面の部分的な調査では鉄器時代の土器しか見つからず、築造年代に疑問を残している。手を清める石灰岩製容器も、マサダやガムラなど、シナゴーク跡で発見される特徴的な器物だが、こちらは同じものがテル・レヘシュのローマ時代の層位から多数見つかっていて、当時の住民がユダヤ教の清浄規定に従っていたことを物語る。マサダでは祭司の税や聖書テキストを記した巻物の断片が見つかり、ガムラやミグダルでは、ロゼッタやナツメヤシのレリーフなど宗教的なモチーフを持つ器物が発見されているが、テル・レヘシュのシナゴーク跡近辺ではこうした遺物はまだ見つかっていない。

初期シナゴークは、後世のシナゴークと異なり、律法の櫃を常時置くための場所はまだなかったが、建物の外から運んできた律法の巻物を読むための講壇やその痕跡が遺構として認められている。テル・レヘシュのシナゴーク跡の部屋中央で見つかった台座状の切石が、果たして、こうした講壇なのか、それとも、天井を支える柱の礎石なのか、さらに比較検討を行う必要がある。また、ラビの規定によれば、シナゴークの出入り口はエルサレム神殿を模範として東側に設けられるべきものだが、これまで知られている初期シナゴークで東側に出入り口があるのはマサダ、ヘロディオン、モディインのシナゴークだけで、テル・レヘシュの新事例は、今後の確認を要するものの、出入り口が東側に設けられた事例として注目に値する。

そもそも、シナゴークはエルサレム神殿から独立した宗教施設ではなく、いわば補助機関としての役割を期待されていた。しかし、第1次ユダヤ戦争後のエルサレム神殿なき時代においては、シナゴークの宗教的な役割はより高まり、ユダヤ人の生活の拠点として各地に広がったシナゴークの建物は、かつて神殿が建っていたエルサレムの方向を向けて建築されるようになる。エルサレムの方向を向いてはいないテル・レヘシュ遺跡の初期シナゴーク跡は、紀元2世紀の第2次ユダヤ戦争（バル・コホバの乱）以前の特徴を留める貴重な事例であり、未調査部分の様相の解明を含めて、今後のさらなる調査研究が各方面から強く期待されている。

[参考文献]

山野貴彦、2014年「新約時代におけるパレスチナのシナゴーク」『考古学からみた聖書の世界』月本昭男先生退職記念献呈論文集、第2巻